



Fuzoku Lounge for Practical Studies

# ふぞく研究ラウンジ no.13

発行：2024.1.22

編集：鳥取大学附属学校部

「ふぞく研究ラウンジ」は、鳥取大学附属学校4校園が取り組んでいる教育研究の「今」をお知らせする広報誌です。地域の教育関係者の皆様とともに地域の教育について考えるための「対話」の場を作りたい、との思いからスタートしました。

第13号では附属幼稚園、附属小学校、附属中学校、附属特別支援学校の今年度の取組を紹介しております。

皆様からのご意見やご感想をお聞かせください。

## 附属小学校

研究主題

### 個別最適な学びが 未来の知への探究心を高める (2年次)

力を挙げたうえで、それらを育てる教育の方向性が示されました。それが、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」となります。鳥大附属小学校では、個別最適な学びに着目し、研究テーマを「個別最適な学びが未来の知への探究心を高める」として研究に取り組んで2年次を迎えました。

教育の現場では、令和3年に「令和の日本型学校教育」の構築を目指して、中央教育審議会の答申が出されました。この答申では、急激に変化する時代の中で育むべき資質・能力



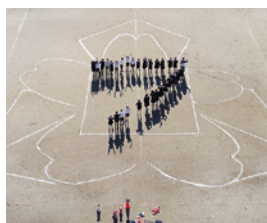
【附属小研究概要】



5年「ものどけ方」  
実験観察から、自分の予想を検討し、より妥当な考えを導いていきました。



6年「図形の拡大と縮小」  
校庭に拡大した校章を描くにはどうすればよいか探究していきました。



「校章のドローン撮影」  
学習の終わりには、子供たちが協力して校庭に実際に校章を描きました。



1年「きせつとあそぼう」  
個人の好きな自然素材を選んで、自分のやり方で思い思いの遊びを創造していきました。



2年「めざせ！  
マットあそびのたっ人」  
個人のめあてを達成するために、自分のやり方で各自技の練習に励みました。



6年「He is famous.」  
自分の推し紹介に必要な英語表現、練習の仕方を自己調整しながら練習しました。

## 今後の研究の方向性

本年度の研究から、個別最適な学びを実現するうえでポイントになるものが見えてきました。まず、問い（課題）の設定と評価です。単元の導入でどのような問いや課題を提示するかによって、子供の意欲付けや個別最適な学びのデザインが左右されます。評価として、どんな力、どんなレベルの力を評価するのか、評価方法も含めて検討しておく必要もあります。

次に、子供の文脈に沿った課題設定、めあて設定ができることが大切になりそうです。個人の文脈に沿った設定ができなければ、自分の目的に向かって自己調整しながら課題解決することはできないでしょう。そして、個が尊重される学習環境です。「自分はこう考える。」「友達の考えを聞いてみたい。」「そんな風に考えているんだ。」といった具合に自然と交流できる個が尊重される環境がないとやはり協働的な学びも成立しません。個別最適な学びを実現していくには、いくつかハードルを超えなければなりません。研究を通して地域に還元できたらと思います。

# 附属幼稚園

令和5年度 研究テーマ

## 子どもが夢中になって遊ぶ保育を目指して 友だちとつながり

### 遊びを深める

本園では、子どもが自ら遊びを見つけ試行錯誤し遊びを深めていく中で、様々な経験をするを大切に、「遊びは学び」をキーワードに保育実践と研究に取り組んでいます。

今年度から取り組んでいる「フォトエピソード記録」について紹介します。**子どもたちの思いや願い**から生まれるつぶやきや思考を大切にしたい遊びの展開を重視し、**子どもの姿や保育者の援助**、さらに時間の経過を記録しています。**遊びを深めるポイント**となった保育者の援助にポイントマークを付け、考察の枠を設けて遊びを振り返ります。フォトエピソード記録は、2～3か月の長期間の記録としたことで、遊びのつながりを今まで以上に意識するようになり、

保育の見通しをもちやすくなりました。また、継続した遊びをまとめることで、子どもの姿の変容や保育者の援助のポイント等が分かりやすくなりました。

一方で、子どもが夢中になって遊んでいるときは、保育者も一緒に中に入って遊んでいることが多いため、記録に載せたい写真を撮れない時があります。職員間の連携が、さらに大切になってくると考えます。今後は、フォトエピソード記録の良さを活かすために、評価表の形式についての検討が必要であると考えています。

## フォトエピソード記録

春の草花で遊ぼう	5歳児 4月～6月上旬
----------	-------------

主な遊びの流れ  
4月。保育者は、春の自然に親しんで周りの様子に関心をもって見たり触れたりするきっかけを作りたいと考え、保育環境としてポケット図鑑や植物一覧表を準備した。子どもたちは、ポケット図鑑を持ち歩いて遊ぶことに興味をもち、植物の名前を確認することからその後、植物そのものへの興味へと変化させていった。子どもたちは、使って遊びたい草花の場所を伝え合ったり、草花を使ってBBQのごっこ遊びを楽しんだりした。その後、色水遊び、草花を使った製作、コロンと色水を使った遊び、カラーヨーグルトの苗作り、シロツメクサの王冠・腕輪作り等々、遊びを発展させた。

**子どもの思い・願い**

4月中旬

子どもの思い・願い  
ポケット図鑑を使ってみたいな  
捕まえた虫。このポケット図鑑に載っているかな？  
ほら、この小さなお花。ここに載っているよ。  
シロツメクサの葉っぱだよ。赤

**子どもの姿**

子どもがそれぞれ見つけた植物を担当が一緒に確かめ赤丸で囲むことによって、みんなで見つかった種類の植物を見つけようとする。  
【自然との関わり・社会生活との関わり(情報活用)】

知っているよ。この花はバンジーって言うんだよ。  
紫が楽しいよ。

**保育者の援助**

Point  
園庭に見られる植物を1枚に収めた図鑑を貼り出す。  
子どもも色水遊びで使っているこの花は、何って言う花か知ってる？  
どの色が好き？

5月上旬

草パーティー(BBQ)をしようよ

使いたい草花のある場所を互いに伝え合ったり、一人のアイデアを発端に、草を使ったBBQごっこをしようみんなで準備したりする。【協同性・言葉による伝え合い】

その草、どこにあるの？教えて！  
こっち、こっち。ここにがあるよ。ほくが教えてあげる。  
みんなで、草パーティーしよう！  
はじめに、土を洗って落とそうで。  
このボウボウの草を使って、草色のジュースを作ろうや。

違色色のジュースも作ろう！私、紫のを作る。  
私は何？  
この赤色も作ってみる。  
これまで何度も経験した遊びなので、子どもたちのよいアイデアや気づきを認め、言葉で他の子どもたちに共有する程度にとどめ、なるべく見守ることに徹した。

食べ物もいるよね。これをご飯にしよう。  
こんなジュースはどう？  
この赤色は、火にも使えるんじゃない？  
見て！この色！  
ピンクのジュースもできてよ。  
料理をお皿に乗せて……

**保育者の援助**

子どもたちにとって、遊びは学びそのものです。これからも子どもたちが豊かな経験を積み重ねる保育を実践し、夢中になって遊ぶ子どもの姿を目指していきたいと考えています。



## 附属中学校

研究主題

### ともに広げともに深める

### やりくり 授業の設計(1年次)

昨年度まで、本校では「やりくり」という言葉をキーワードに授業づくりに取り組んできました。従来の授業では、教師の設定した目標に到達するために授業が設計されることが一般的です。それに対して「やりくり」授業とは、答えや解法が1つに定まらない問いを設定した授業を意味しています。その問いに向かうためには、生徒は既存の知識や技能をどのように使うか、必要な情報をどのように獲得するかを考える必要があり、その過程で、思考力・判断力・表現力を養おうとしてきました。



昨年度末に、教員の中で「生徒のどのような力を伸ばしていきたいか」についてワークショップを行いました。その結果、伸ばしたい力は以下の2点にしばられました。

1点目は「他者と関わり合う力」です。例えば、夢を語り合う力や自治力、雑談力、コミュニケーションによる人間力の向上などが上がりました。弱さも認め合えることや、仲間と混ざり合って伸ばしていくことのできる力など、多様な他者との関わりに関する記述が多くみられました。これには、他人との関わり合いを通して学びを深めてほしいという授業者の願いが見られます。2点目は「当事者意識」です。本校の教員は点数に現れる力以上に、教科本来の楽しさを感じる力や好奇心をもって学びにのめりこむ力、自分の学びであるという自覚が育ってほしいと願っています。



特に、学校生活や学びの時間は、大人から与えられ、準備されているものではなく、自分たちで作りに上げるものだという当事者意識を育てていきたいという思いが現れていました。以上の2点をふまえ、本年度からは、「やりくり」授業をさらに発展させ、仲間と共に学び合う授業設計に取り組んでいくことにしています。

本年度は、教科ごとに伸ばしたい力を設定し授業づくりを行いました。特に研究大会前には東京大学大学院教育学研究科学校教育高度化専攻教育内容開発コース教授の藤村宣之先生との授業検討の機会を増やし、授業者の授業や授業づくりでの悩みなどに助言して頂き、研究大会当日を迎えました。



### 研究発表大会

令和5年7月10日(月)に開催した研究発表大会では、全教科の授業公開と学校保健のワークショップを行いました。大会前には鳥取大学の先生方に大変お世話になり、指導助言をいただきました。大会当日には県外からも参加していただき、有意義な研究協議を行うことができました。

午後の講演会では「生徒たちがともに思考を深める授業づくり～協同的探究学習を通じた『わかる学力』の育成～」と題して、藤村宣之先生にご講義いただきました。この講演会では、先生の参加されている他校の教育実践や、教育心理学の論理を基にお話しいただき、私たちが挑戦しようとしている「ともに広げ、ともに深める」学習活動が、生徒の思考力・判断力・表現力をどのように深められるのかに

ついて拝聴することができました。

なお、各教科の具体的な授業実践とその効果については年度末に発行予定の研究紀要に詳細を掲載いたしますので、ぜひご覧ください。

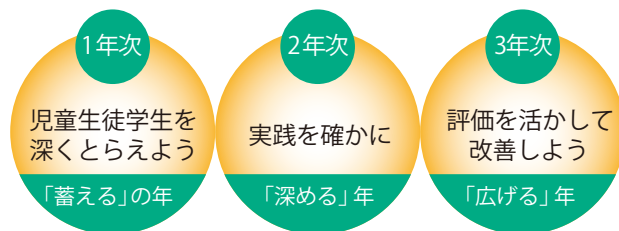
## 附属特別支援学校

研究主題

# 6歳から20歳までの 自分づくりを育む教育実践 ～生涯学習の観点から教育内容を考える (1年次)

本校は「生活を楽しむ」という教育理念のもと、一人一人の主体的な自我・自己の発揮を支える「自分づくり」の考えを基盤にして、児童生徒学生の内面とライフステージを大切にしたい教育活動を追求しています。

本年度から3年計画で、じっくりと「自分づくり」について理解を深め、児童生徒学生や授業のことを話し合えるよう、表1で示したような計画で研究活動を進めていきます。



{表1-研究計画}

{表2-研究授業の様子}



友だちと一緒に創りあげていく中で楽しさを実感できるような授業をめざし、「秋の家」をつくりました。



自ら発見する楽しさと仲間同士で伝え合っ共有する気持ちを高めるような授業をめざし、顕微鏡で見たものを伝えあう授業をしました。



仲間の中で役割を自覚し、自分と向き合い自己決定・自己選択していけるような授業を検討し、3つの作業班での作業を公開しました。

1年次の本年度の研究方法は事例研究と研究授業を行いました。事例研究では、事例児童生徒学生の「自分づくり」の姿を深く捉えるため、学部内でエピソード記録をもとに検討を進めました。研究授業では、「自分づくり」を支える授業、ライフステージの願いに応じた授業といった観点とともに、本年度は生涯学習の観点からも行いました。この時、各学部の生涯学習の捉えが異ならないよう、本年度は生涯学習を「自分づくり」+「社会参加（社会とつながる）」学習と捉えることにしました。（この捉えは、来年度以降変更するかもしれません。）

また研究活動の充実を目的として、鳥取短期大学の國本真吾教授による「ライフワイドの視点で生涯学習と学校の間を考える」をテーマにした講義を頂いたり、各学部で研究協力者の先生方を招いて必要な研修を行ったりしました。10月には神戸大学の授川地亜弥子准教授を招いて、各学部の授業への助言を頂きました。



校内喫茶「ほっこり茶房」の話合いの取り組みを通して、いろいろな人と関わりながら、自分らしく成長し続けようとする姿を引き出しました。

## 池畔好日

■第13号をお届けします。本号では、附属4校園の令和5年度研究の取り組みについて紹介しました。■附幼では「遊びは学び」を、附小では「個別最適な学び」を、附中では「生徒が主体的に学び合う『やりくり授業』の設計」を探求しています。附幼で好奇心の種を撒き、附小で好奇心の芽を育て、附中で多様性の中から自分独自のつぼみを膨らませていく一連の支援活動です。附特支では「6歳から20歳までの自分づくり」をさらに先の生涯学習をにらんで設計しようと模索中です。■2023年人工知能AIが急に身近な存在となりました。分野によっては5年後には、全般的にも20年後にはシンギュラリティ（人工知能などが人間の

知性を遙かに凌駕する時点）に到達し、社会・生活が大きく変容すると予想されています。産業革命以来の一大変革を迎えました。しかし創造的な分野は、考える力や感じる力を持つ人間の特典として残り続けることと期待しています。今の子ども達がまさに活躍する時代です。将来を見据えて園児・児童・生徒・学生の成長を支援していくことが求められています。■実践教育研究の強みは、調査対象である子ども達が目の前にいることです。教育目標を定め、彼らをしっかりと観察し、教育の効果を評価し改善につなげるPDCAが鍵となっていきます。みなさま読後の感想をお聞かせ頂ければ幸いです。